

## 【報告】

# COVID-19 流行下における 統合実習（慢性看護学領域）の展開と課題

兼子 夏奈子<sup>1)</sup> 河野 貴大<sup>1)</sup> 大山 末美<sup>1)</sup> 長山 有香理<sup>1)</sup> 本田 彰子<sup>1)</sup>

1) 聖隷クリストファー大学看護学部

## Development and Issues of Integrated Practice (Chronic Nursing) under the COVID-19 Pandemic

Kanako Kaneko<sup>1)</sup> Takahiro Kono<sup>1)</sup> Suemi Oyama<sup>1)</sup> Yukari Nagayama<sup>1)</sup> Akiko Honda<sup>1)</sup>

1) School of Nursing, Seirei Christopher University

### 《抄録》

成人・慢性看護学領域では、現在、講義・演習・実習科目の連動性や段階的な学びを意識した教育内容への見直しを進めている。統合実習については、2020年度より、臨地実習と学内演習との連動性や段階的な学びを意識した教育活動を実施した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により臨地実習日数の短縮などがあったが、実習プログラムの大幅な変更をすることなく、実習はでき、実習目標も前年度と同様としたが、学生は実習目標の達成がおおよそできた。教員は、今後も実習や教育形態が変化しても教育の継続性、質の保証がなされるように変化に備えた教育方法の検討を重ねる必要がある。また、こうした教育活動に対する評価を行っていくことが今後の課題にある。本報告では、2020年度の統合実習（成人・慢性看護学領域）における教育活動の実際と、今後の課題について報告する。

### 《キーワード》

統合実習、慢性看護学、看護基礎教育、臨床実践能力、COVID-19

## I. はじめに

現在、厚生労働省の看護基礎教育検討会による看護基礎教育内容の改定が12年ぶりになされ、2022年度から新しいカリキュラム開始方針となっている。「2019年度の看護基礎教育検討会報告書(案)」(厚生労働省、2019)において、今後の看護職の役割拡大や多様な活動場所を見据え、看護基礎教育において一層の臨床判断能力等を養うことが必要であると報告されている。本学看護学部もこの指針を受け、カリキュラム改革の準備段階にある。慢性看護学領域(以下、本領域と称す)では、現在、講義・演習・実習科目との連動性や段階的な学びを意識した教育体制へ取り組みを進めている。そして、統合実習(慢性看護学領域)では、本年度より病棟実習と学内演習において段階的な学習を意識し、学生が臨地実習で得た経験を意味付け、知識の定着を図るために実習目標に沿ったシミュレーション演習などを利用した実習プログラムを行った。

看護基礎教育における統合実習の位置づけについて小山(2012)は、「卒業後スムーズに実践現場に適応できるような環境で、知識と技術を統合できるような内容で、チーム医療の必要性の理解とともに、複数患者を受け持ちチーム員として学生自身がタイムマネジメントをできる基礎的な能力を養うように位置付けられている」としており、看護基礎教育における実習の役割は大きい。しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染症(以下COVID-19と称す)拡大によって、教育活動は大きな影響を受け、臨地実習の中止が余儀なくされている教育現場は多い。平時の臨地実習ができない状況に置かれた本学看護学部の学生からは、臨地実習や就職後の不安を表出する者もいた。臨地実習における経験不足がもたらす影響について、良村ら(2007)は「新人看護師の実践能力の低下と実践現場で

求める内容との乖離や新卒看護師の離職などの要因」となるとしており、COVID-19拡大は、学生の卒業後にも様々な後遺症を与え得ることも懸念される。本報告では、本年度の統合実習(慢性看護学領域)の展開と課題について報告する。

## II. 目的

2020年度の統合実習(慢性看護学領域)における実習プログラムと、教員の教育活動の実際と結果に関する報告と、今後の課題について報告することが目的である。

## III. 本領域における講義・演習・実習科目との連動性や段階的な学びを意識した教育体制への取り組みについて

最初に、2018年度より本領域における教育の核となる看護は何とするのかを吟味して定めた(現在は、2019年度成人看護学援助論Ⅲ以降より「慢性疾患患者のセルフマネジメント」を核と位置付けている)。教員は、その“核となる看護”を基に講義・演習・実習科目において、学生が新しい知識や技術や考え方の学習を習得するために「身につけた知識の意味を理解し、明らかにし、応用していく過程」(Norton, 1998)が必要であることの理解の上で、教員は、学習する際の学習過程のなかで学生の「認知的領域」「情動的領域」「精神情動的領域」の側面を意図的に刺激するように教材選択や発問内容やタイミングを工夫し、学生の思考レベルを卒業までに引き上げられるように、検討を繰り返し、教育の組み立てを行う。例えば、講義科目では「これまで学んできた専門基礎分野の知識と、専門看護分野の新しい知識とを併せて、看護に必要な考え方や意味について理解できる」ことを到達目標としている。演習科

目では「講義科目での学習を活用して、事例展開などを用いながら、看護に必要な考え方や意味について看護の実際を体験してみる」そして、実習科目では「講義・演習科目での理解や体験で得た学びを応用して、実際に活用してみる」というように、科目のどこまで到達させ、次にどこへ進むのかといった連動性について、教員だけでなく学生にも分かるように提示し、同じ目標に向かって学習を進められるようにしている。段階的学びについては、単に「講義・演習・実習の流れ」だけを指しているのではない。臨地実習での学びと並行して、もしくは早いタイミングに学習の機会を計画することで、学生の学習の深化を促すことにつながる。これらを有効に展開するためには、臨地実習とその後の学習それぞれで達成すべき目標や全体像について教員全員が把握し、適切なタイミングでの発問やかかわりによって、また、臨地実習での学修目標を教員・臨床指導者と丁寧に共有し協力を得ながら、学生を導くことが重要であると考え、取り組んでいる。

#### IV. 本学看護学部における統合実習の概要

本学看護学部では、4年次春 Semester までの領域別臨地看護学実習で、主に受け持ち患者1名に対する看護問題の抽出、看護ケアの計画・実践・評価する方法で行っている。統合実習は、領域別臨地看護学実習を統合する実習として、生命の尊厳と隣人愛を基盤として対象と適切な対人関係を築き、既修の知識・技術を活用し、看護実践現場の特性を踏まえて、問題解決的思考を展開しながら、看護における課題の解決に向けた実践に必要な基礎的能力を養う。また看護チームおよび保健医療福祉チームにおける多職種連携・協働の現状について理解を深め、そこで提供されている看護の実践を経験し、保健・医療・福

祉チームの中で看護専門職としての役割を考えて行動することができることを科目の目的・目標としている。

#### V. 統合実習（慢性看護学領域）の概要

##### 1. 履修学生数および教員数と実習施設

履修学生 :24 名

実習担当教員 :5 名（準教員 1 名を含む）

実習施設 : A 病院（6 病棟）

B 病院（6 病棟）

##### 2. 統合実習（慢性看護学領域）の目的・目標

「これまでの学内での学修および領域別臨地実習での学びを基盤に、主体的な行動ができること、自分の力量を理解し複数患者に対して根拠に基づいた安全性の高い看護の提供のための優先順位や時間管理を考慮した行動計画の立案・実施をすること、看護チームにおけるチームメンバーの役割を理解できること、自身の看護観を深めること」を学修目的としている。

実習目標は以下の4つである。

**実習目標（1）**：自分の力量を理解しながら実習目標の達成に向けて、主体的に実習に取り組むことができる。

**実習目標（2）**：看護チームにおけるリーダー看護師・チームメンバーの役割を理解して、チームの一員としての行動がとれる。

**実習目標（3）**：複数の患者に対して安全性の高い看護を行うために、優先順位や時間管理を考慮した行動計画を立てて実施し、評価・修正することができる。

**実習目標（4）**：実習経験を通して、看護職としての自己の目標や課題を明らかにし、看護観を深めることができる。

### 3. 統合実習（慢性看護学領域）の日程

2020年度の統合実習（慢性看護学領域）（以下：本実習と称す）は全8日の日程とした。また、臨地実習日数は、実習目標達成可能とするのに必要な最短日数を領域内で検討したうえで、実習1週目の3.5日間とした。

<1週目>

1日目：学内オリエンテーション、事前演習「多重課題演習」

※A病院配置学生を午前に、B病院配置学生は午後に分けて対面形式で実施した。

[2日目～5日目：臨地実習]

2日目：病棟オリエンテーション、情報収集

3日目～5日目：複数患者受け持ちの実施、日勤リーダーへの報告または見学の実施、最終日に最終カンファレンス開催。

<2週目>

1日目：学内演習①「看護チームメンバーの役割とチームの一員としての役割」

2日目：学内演習②「行動形成プログラムを用いた実践的患者観察技術」

※1日目・2日目：履修学生全員で対面形式による学内演習を実施した。

3日目：最終面談、実習記録提出

## VI. 2020年度の本実習における教育活動

### 1. 統合実習に向けた教育活動の実際

本実習に際し、教員は、学生側にとっても、臨床側にとっても安心して実習を向かえることができるように下記1)～4)について対策や各所調整を図った。

#### 1) 学生への事前調査・情報提供

本年度は、COVID-19拡大が大学教育へも多大な影響を及ぼした。本学看護学部でも5月～6月の臨地看護学実習は完全な遠隔実習となった。本領域では、7月の統合実習以降も臨地実習ができない可能性も念頭に、複数の代替実習案の検討および、教材作成を進

めていた。また、統合実習の臨地実習の可否は、6月中旬頃まで不透明な状況であった。履修学生には、例年4月に行う統合実習オリエンテーションの代替として、統合実習に必要な資料や情報提供を6月以降に学習管理システム（Learning Management System）であるWeb Class（日本データパシフィック株式会社）を利用して提示を行った。結果、幸いにも統合実習は臨地実習が可能となった。しかし、病棟実習に向けた学生の病棟配置決定の際、JR東海本道線および東海道新幹線を交通手段とする学生の受け入れ困難な施設もあり、居住地や交通手段、同居者の行動歴等に関するアンケートをGoogle Forms（Googleドライブ上で使用する問い合わせやアンケートなどのフォームを簡単に作成することができる無料ツール）を利用して調査を実施した。この調査結果と学生の希望病棟を最大限に反映し病棟配置を決定した。

#### 2) オリエンテーション・事前演習方法

例年は、実習オリエンテーションおよび、事前演習（多重課題演習）を履修学生全員と対面方式にて実施していたが、本年度は、実習施設が異なる学生同士が実習前に交差することを避けるために、施設別に午前・午後の2部制での実施を決定した。

#### 3) セルフトレーニング

学生が、成人看護学実習室で行えるセルフトレーニングの内容・使用制限・方法について、急性看護学領域の教員と共に検討・準備した。主として領域や実習施設の違いによる学生の交差や、他学年や他学部との交差が最小限となるように利用日程調整を「りざぶ郎（無料のWebスケジュール管理対応サービス）」を活用して行った。また、学生には感染予防対策の徹底とフェイスシールドの提供、使用物品や机や椅子などの消毒シートでの清掃を徹底させた。教員は適宜、学生のトレーニング状況を確認し、必要に応じて指導した。

統合実習を目前に学生は、臨地実習が可能

となり前向きな反応を示す者が多かったが、一方で、久しぶりの臨地実習に対する不安や、意図せず学生自身が感染の媒介者となったときに患者を感染の危険に曝してしまうのではないかといった懸念や、就職後における看護技術の遅れや臨地実習経験が少ないことによる周囲からの評価や偏見について不安抱いている様子もあった。そのため、教員は、学生が期待と不安を抱えながら実習に挑もうとしていることを十分に理解したうえで、臨地実習の前後において、より細やかな支援をする必要があった。

## 2. 統合実習の実際

ここでは、実習目標 (1) ～ (4) に対応して、実施した実習プログラムと、教員の教育活動と結果について述べる。

### 1) 実習目標 (1) に対するプログラムと教育活動

学生が「主体的に実習に取り組む」ための新たな取り組みとして、臨地実習初日の病棟オリエンテーションでは、学生が、病棟の看護チームの一員として役割を果たすために必要な準備と態度について学生の意識づけを図ることをねらいとして実施した。教員は、主体的に病棟オリエンテーションに臨むための事前準備とオリエンテーションの実施について臨床指導者と調整するように学生へ働きかけた。このねらいの背景には、これまでの病棟オリエンテーションでの学生の受け身な態度や、病棟側は多忙業務と並行して、オリエンテーションに毎回 1 ～ 2 時間といった長時間を割く現状であったことにある。

結果、学生らは、事前に臨地実習病棟での看護やチームの一員として順応するために必要な情報収集を、病棟の情報について、教員が準備した病棟資料や病院ホームページ、病棟実習経験のある学生にインタビューするなどして整理した。くわえて、病棟オリエンテーション当日に臨床指導者から説明を得る必要

のある事柄は何なのかについても整理していた。実際の病棟オリエンテーションでは、学生は、臨床指導者に事前に開始時間の調整や、学生で病棟内を探索する許可を得て実習病棟内の物的環境の把握に努めた。さらに、学生は、臨床指導者からの説明時に、基本的な病棟のルールや、病棟の看護方針、緊急時における学生の役割などについて質問できていた。学生の態度からは、学生自身の時間管理のみならず、臨床指導者など相手の時間も意識した行動や、1 日でも早く実習病棟に慣れようとする姿、病棟その病棟の看護チームの一員として臨床看護師となったときに必要な態度であると理解に努める様子が伺えた。さらに、病棟側と学生側も予め時間調整できたことで、学生も待機時間が無くなり、時間を有効に使い実習を進めることにつながっていた。

### 2) 実習目標 (2) に対するプログラムと教育活動

本年度は、実習目標 (2) 「看護チームにおけるリーダー看護師・チームメンバーの役割を理解して、チームの一員としての行動がとれる」のうち、「看護チームにおける一員としての個の役割について学びを深める」ことに焦点化した。

実際の内容としては、1 週目の臨地実習期間内において学生は、少なくとも 1 回は、日勤リーダー看護師への日勤の申し送り、または、申し送りの見学を実施する。次に、2 週目の学内演習①で、日勤リーダー看護師の役割に関するミニ講義と、「日勤リーダー看護師から見える看護室内を立体映像化した視覚教材 (図 2)」を RICOH THETA で撮影した 360° 静止画や動画を閲覧するためのアプリケーションである「全地球サイト『theta360.com』」を活用し、学生がパソコンやスマートフォン、タブレット端末などを使用し、目的に沿って画像内を自由に動かして観察する。その上で、「看護チームにおける一員としての個の役割や動きをすることの必要性」につ

いて、学生が臨地実習で学び得たことを意味付けし、看護チームにおける一員としての個の役割に対する知識の定着と今後の看護実践への向上の促しを図ることを目的に教育プログラムを計画した。ここでは、臨地実習での体験を、後の講義とシミュレーション演習によって知識と理解をもとに臨地実習で経験した場面のなかで起きていたことの意味をもう一度、考えるといった順序で学生の学習が実習目標に到達できるように組み立てた。教員の教育活動としては、臨地実習では「学生の取り組みを見守る」とともに、「学生が、日勤リーダー看護師へ申し送りするときに留意した点や工夫した点は、何かを学生と振り返る」または見学する学生に対しては「申し送りをしている看護師は、どのような点に留意をしたり、工夫をしているか観察してこられる」ように働きかけた。次に、学内演習②での教育活動では、学生が、講義や画像教材を使用したシミュレーションを通じて、日勤のリーダー看護師の役割には「患者の安全を守るためにリスクマネジメントを実践する」や「患者の状況、チームスタッフの業務量を把握し調整する」、「チーム内に問題発生時、速やかに対処し報告する」などがあり、これらを実践するために、日勤リーダー看護師が、ナースステーション内で意図的な位置取りをしていることや、その場所に居ながらも患者やスタッフなど多方面に気を配り、観察し、マネジメントしていることを模擬体験から学び取れるように発問をした。その結果、学生は、実習での経験を振り返り、日勤リーダー看護師の業務や役割を妨げないために看護チームの一員としてどのような動きをする必要があったのか、報告・連絡・相談する適切なタイミングについても内省するに至った。

くわえて、教員は、「看護チームの一員として自らの役割を果たすためにも、看護チーム内の役割や多職種のもつ役割を知る必要性について、学生が再考できる」ように、「看

護職としての実践に向けた自己の課題について学生が考えを発展できる」ように教員に働きかけをした。結果、学生は、画像教材を通じて学生個々に必要な時間を掛け、自由に日勤リーダー看護師から見える看護室内を疑似体験し、観察を行えたことで、具体的に他者の役割を理解し、看護チームの一員として自己に求められる役割や行動のポイントを自分たちで整理することができていた。こうした学生の学習成果は、臨床現場での速いスピードで展開される場面のみでは得られにくい学びを補足した。今回作成した画像教材は、臨地実習での学びを深めるために有効であったと考えられる。今後の課題としては、画像教材が学生の学習により有効となる活用方法として実習期間中に使用するタイミングや演習内容の見直し、学習成果の評価方法等を検討することが挙げられる。

### 3) 実習目標 (3) に対するプログラムと教育活動

本実習では、例年、複数の患者受け持ちに必要な多重課題解決のための学習として、実習前に多重課題演習を実施し、その後の臨地実践学習に連動させている。本年度も同様としたが、感染症予防の観点から、施設間交差避けるために、事前演習は各実習施設に分けた午前・午後の2部制とし、対面形式で実施した。事前演習で行う多重課題演習は、紙上事例を用いたロールプレイであり、1グループにつき学生4名で実施した。事前演習では、複数の患者に対して安全性の高い看護を行うために必要な優先順位の決定や、時間管理するための工夫についてグループディスカッションし、学生は臨地での複数患者受け持ちに備える。事前演習までの教員の活動は、演習でのファシリテーター役割をはじめ、学生に「臨床の看護師が複数の課題を抱える中で適切に対処するために、現場でどのような工夫をしているのか観察すること」や、「学生と看護師とで、同一場面での判断や行動が異



図1. 日勤リーダー看護師から見える看護室内を立体映像化した視覚教材 (a.b.c.)

なったときには、その判断に至ったアセスメントについて聞かせてもらおうと良いこと」などを投げかけ、学生が臨地実習において学びを発展できるように働きかけた。学生は、5～6月の領域別臨地看護学実習が遠隔実習などに変更を余儀なくされたこともあり、限られた実習期間で、ひとつでも多くの学びや経験を得ようと、日々の実習に対し積極的に取り組む姿勢が、患者とのかかわりや臨床指導者とかかわる様子、実習記録内容から観察することができた。臨地実習における教員の活動では、臨床指導者と「臨地実習期間における到達目標の程度について共有すること」、「臨床看護師としてのアセスメントを学生へ伝えてほしい」ことを依頼した。くわえて、臨床指導者へ「学生へ日々、気になった1場面についてフィードバックをしていただけるよう」に働きかけた。

結果、学生は臨床指導者からの確かなフィードバックや助言を得られたことで翌日の行動計画に反映することができていた。例えば、学生は、患者の病態やニーズに沿った看護介入や複数受け持ちをする中で効率的かつ適切に介入するための時間管理や、忘れないための工夫を考え、患者に必要なケアのために臨床指導者以外のスタッフとの業務調整が一部できた。このような学生の日々の反応や成長を目の当たりにして、当初は、臨地実習日数短縮について、実習目標到達度や、臨床に出るからの看護技術の遅れなどを懸念する声が聞かれた病棟側からも、実習目標到達が十分できたとの評価を受けることができた。この結果の背景には、病棟側による入院患者数が少ない中でも実習目標や各病棟の看護目標に照らした患者選定への配慮や、病棟・臨床指導者の本実習での到達目標内容への十分な理解と、学生への丁寧で的確な指導を頂けたことが要因のひとつであった。

#### 4) 実習目標(4)に対するプログラムと教育活動

統合実習全体として、学生の看護職としての自己の目標や課題の明確化を促すために課題レポートの作成がある。学生は、各領域での統合実習のみならず、これまでの領域別臨地看護学実習での経験や学び、課題などから見出したテーマに沿って文献を活用しながら自己の看護に対する考えを言語化させている。くわえて、本実習では、2週目の学内演習②に看護専門職として、看護ケア提供時のコンピテンシーを高めるための実践的な患者観察行動ができることを目標としたプログラムを盛り込んだ。この設定の背景には「2019年度の看護基礎教育検討会報告書(案)」(厚生労働省, 2019)において、看護基礎教育において一層の臨床判断能力等を養うことの必要性が報告されていること、日本では、現在、看護職におけるコンピテンシー基準は明確にはないが、本領域では、目の前にいる患者の状態を科学的根拠に基づき速やかに解釈し、必要な看護を選択して実践につなげるといった臨床判断する力は、看護職にとって重要なコンピテンシーの要素のひとつと捉えたことにある。

演習では、わずかな患者情報と事例患者のベッドサイドの画像から、看護師の臨床判断するために必要な系統的かつ順序性あるステップでの解釈について習慣化できるよう問いを設定し、ミニ講義と演習を併せて展開し、学生が臨地実習での行動を振り返るようにした。教員の教育活動としては、学生が演習で「系統的かつ順序性をもって患者観察ができよう支援する」とともに、「学生に看護専門職として看護を提供する際には、感覚や経験的な判断ではなく、臨床判断に基づき、ひとつひとつの看護行為を行う必要があることを想起させる」こと、「学生がこれまで展開してきた看護行為について、その看護行為に至るまでの思考の流れや、そのとき何を思考する必要があったのかについて振り返る」ことができるように計画した。その結果、

学生は、学内演習②によって、患者に関わったりケア提供をするときに、必ず科学的根拠に基づくアセスメントが必要な理由を実践的に理解したり、よい看護を提供するためには、これまで学んできた知識やスキルを引き出し、複数組み合わせることを考える大事さを再確認した者や、その場面ごとに迅速に看護過程を行い介入につなげる必要性について学び得ていた者もいた。またこれらの学びから学生自身の力量について改めて考え、看護職者になってからも研鑽が必要な課題であると捉えられた者もいた。

学内演習②のプログラムについては、本実習での活用では学生は、内省するに留まる。看護職に必要な臨床判断する力を、学生が臨地実習での実践の場で養うことが可能となるように、2020年度秋 Semester からは慢性看護学実習に演習①のプログラムを移行させている。

## VII. 考察

2020年度の本実習は、COVID-19 拡大に伴う実習教育についての文部科学省の考え方（文部科学省高等教育局医学教育課，2020、福島，2020）や実習施設の状況から、病棟実習と学内実習（演習）と組み合わせることで実習目標への到達を目指した。結果、臨地実習日数の短縮はあったが、本領域における統合実習の目標達成に向けた臨床側の理解と連携強化と、病棟実習と学内演習との連動性や段階的学びを意識した実習の構成とすることで、学生は、概ね実習目標レベルまで到達ができたと考える。具体的な実習目標設定と成果としては、実習目標の設定は、前年度と同様とし、「主体的な行動ができること、自分の力量を理解し複数患者に対して根拠に基づいた安全性の高い看護の提供のための優先順位や時間管理を考慮した行動計画の立案・実施をすること、看護チームにおけるチームメ

ンバーの役割を理解ができること、自身の看護観を深めること」とした。実習前には、臨床側や学生からの不安も聞かれたが、統合実習終了後の学生による授業評価における病棟・臨床指導者への評価は高く、病棟側からも良好な評価を得られた。この背景には、多くの学生が、臨床指導者の本実習の到達目標内容への十分な理解に基づく、日々の看護計画や実施における実習指導者から肯定的なフィードバックを直接受けられたことで自信や学習意欲の向上につながったこと、くわえて、看護実践では、臨床指導者から学生自身では見出せなかった複数の視点での考え方について多く話して頂けたことで、学生は自らの課題へ気づくことができていることが挙げられる。また、学生は複数患者を受け持ちに際し、実習前の多重課題演習で優先順位をつけて行動する意味や難しさを体験し、それらを活かして臨地実習に臨めた学生も多かった。しかし、実践する中で時間管理の難しさや急な変化に対応するためのアセスメントや、計画には常に調整が必須であることを実習指導者から丁寧なフィードバックを受けながら体験し、学ぶことができていた。そして、実習2週目の学内演習①②では、学生が臨地実習で得てきた経験を前提に、知識の定着や学習の深化を促すことを目指した内容とした。この演習を通じて学生は、自身の経験について内省し、看護専門職としての自己の課題の明確化につながっていた。他大学における看護学実習の取り組みからは「オンライン実習でも同様に記録物を最終評価とし、例年と同程度の内容であったと感じている。バーチャル・シミュレーションについては、むしろ通常の臨床実習以上に自分で考える力がついたのではないかと思う。（益田ら，2020）」と示唆した。くわえて、松山ら（2020）は、医療現場での臨床実習などの実施が困難な場合の代替となるコンテンツ提案の中で、「臨床実習でこそ学べる項目」のうち代替可能な項

目について整理している。本実習は、松山ら(2020)のいう臨床実習でこそ学べる「五感を通じた学び」、「診療プロセスの中での包括的な学び」を実習目標に沿って臨地で体験し、その後の学内演習で補完できるように臨地実習と学内実習の組み合わせにより工夫をしていたといえた。2014年に米国のNational Council of State Boards of Nursingによる全国調査で、臨床実習時間の最大50%まではシミュレーションに置き換えても学習成果は変わらないことが示されている。喫緊の課題としても、看護実践能力としての運動技術から臨床判断のための思考力を高めるために、看護基礎教育での効果的な教育方法の開発が求められている。また、本統合実習の教育方法に対する学習成果としては、学生や臨床指導者などの反応より手応えを感じる場所に留まった。今後は、教育活動に対する評価方法を検討する必要がある。

## VIII. 今後の課題

本年度の統合実習(慢性看護学領域)では、実習目標や到達レベルについて本領域の教員が同じ理解の上、病棟実習と学内演習との連動性や段階的学びを意識した実習の構成を目指した。くわえて、教材の一部に情報通信技術(Information and Communication Technology ; ICT)の活用により、実習形態が変化に応じた流動的な対応ができた。COVID-19拡大の影響のみならず、大学教育改革に伴うパソコン必携化の推進などを鑑みれば、実習や教育形態が変化しても、教育の継続性、質の保証がなされるように変化に備えた教育方法の検討を重ねる必要がある。

今後も、慢性看護学の教授に有用な教育教材の作成や、効果的な教育方法および評価方法の開発を行っていくことが課題である。

## 文献

- 厚生労働省(2007):看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2020.12.19).
- 厚生労働省(2019):看護基礎教育検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2020.12.18).
- 良村貞子, 岩本幹子, 青柳道子他(2007):複数の患者を受け持つ看護管理実習の展開, 看護総合科学研究会誌, 10(3), 65-71.
- 小山真理子(2012):今,改めて看護基礎教育カリキュラムの統合実習を考える, 看護展望, 37(2), 5-14.
- 文部科学省高等教育局医学教育課(2020):新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について, [https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021.2.12).
- 福島統(2020):COVID-19と医学教育—文部科学省及び厚生労働省からの通知文書から—(2020年2月25日から5月16日までの情報から), 医学教育, 51(3), 206-210.
- 益田美津美, 小田嶋裕輝(2020):バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み, 医学教育2020, 51(5), 557-560.
- Hayden JK, Smiley RA, Alexander M, Kardong-Edgren S, Jeffries PR(2014):The NCSBN national simulation study: A longitudinal, randomized, controlled study replacing clinical hours with simulation in prelicensure nursing education, Journal of Nursing Regulation, 5(2), S3-S40.
- 松山泰, 岡崎仁昭, 浅田義和(2020):医学生臨床実習, Pre-, Post-CC OSCEの代替

コンテンツー河北班からの提案ー，医学教育，51（3），216-218.